

葉ショウガ(ハウス・トンネル・露地)

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|----------|----------|----------|----|---------------|----|---|----|----|----|--|
| 作型 | ◎ — ◎ ————— | | | | | | | | | | | | |
| 主な作業 | | 堆土 肥壤 散布 | 土壌 消毒 | 種子 消毒 | 伏せ 込み | 培土 | 紅付 け開 始 | 収穫 | | | | | |

技術体系

1 作型の特徴

葉ショウガ栽培は、植え付けから収穫まで2～3ヶ月の短期間で葉付きの未熟なショウガを生産するものであるから、新鮮さが売りものである。

2 適応地域

全域

3 栽培条件

葉ショウガ栽培は、1回の栽培期間が短く、加温ハウス、無加温ハウス、トンネル、露地栽培などによる周年生産体系が確立されている。加温ハウス栽培では根茎腐敗病が問題となるため、1作ごとに床土の交換、または、消毒を行う。また、ハウスを利用した加温栽培では、低温期の発芽や生育促進のための電熱温床や暖房機などの加温施設が必要となる。

4 施設装備

- (1) 単棟ハウス
- (2) 暖房機
- (3) トンネル

栽培技術

1 品種と特性

葉ショウガの品質を左右する株元の紅色は低温ほど濃く、高温で淡くなる。葉ショウガ栽培には、株元の紅色の発色や塊茎の形から小ショウガ群の品種が適する。

「小ショウガ」

この品種は、早生で茎は細いが萌芽数は多く一株50～70本になる。茎の基部や芽は淡紅色、または鮮紅色である。塊茎は細く繊維が多いが、水分は少なく辛味が強い。

品種はショウガの在来種「三州」「金時」と大ショウガの「氷川1号」などを使う。

2 種ショウガ準備

葉ショウガの栽培では、根茎腐敗病等に汚染されていない無病の種ショウガを確保することが重要である。

根ショウガ栽培の4～5倍の種ショウガを準備する。

3 伏せ込み

(1) 伏せ込み準備

できるだけ肥沃で排水良好な圃場を選定する。土壌消毒が必要な場合は事前に1回耕耘し、土壌が適当なときに行う。一度、根茎腐敗病が発生した場所にはなるべく作付けしないが、作付けするときは土壌消毒

基肥については、種ショウガの養分で生育するので、肥料はほとんど無肥料でよい。

(2) 伏せ込み時期

露地栽培の根ショウガの植え付けと同時期の4月中旬から5月上旬。

(3) 栽植距離

畦幅1.5m（通路30～50cm）の短冊型の床をつくる。

準備した種ショウガは、伏せ込み床に分割せずそのまま隙間なく伏せ込むが、発芽部分を上側にして種ショウガがやや斜めになるように並べる。

伏せ込み量は、10a当たり2,800～3,000kg種ショウガを伏せ込み、上部に通気性や排水性の良い赤土等を3～5cm覆土して全面を平らにし、その上に敷きワラをして十分灌水する。低温期にはさらにポリフィルムやトンネル資材等でマルチし保温する。

4 伏せ込み後管理

(1) 温度管理

伏せ込みから発芽までは萌芽数を多くするため25～28℃の高温にする。1ヶ月を過ぎたら、3葉期（通常伏せ込みから約50日程度）までは床温を20～25℃に保ってやや徒長させ、以降収穫期の6葉期までは15～20℃に下げた管理をする。日中はトンネルやよしず等の被覆資材を除き、茎葉の充実とむれを防止して株元の紅付けをし、商品性を向上させる。株元の紅色の色沢は、在来種及び三州では15℃、金時では20℃内外が適温となる。

(2) 培土

盛夏の時期は生育が早く、腋芽が出て新塊茎が丸く肥大しやすい。このため、腋芽が出る直前に培土する。

(3) 灌水及び追肥

床面は白く乾かないようにし、発芽後は収穫期まで十分灌水を続ける。

新ショウガは5～6葉期のころまでは種ショウガの養分で生育するので、追肥はほとんど必要がない。

(4) 病虫害防除

葉ショウガ栽培では、栽培環境が高温多湿条件となるため、根茎腐敗病には最も注意しなければならない。

5 収穫・出荷

通常の葉ショウガ栽培の場合は、伏せ込み後60～80日くらいで本葉が5～6枚、草丈30cmくらいが適期である。この時期を逃すと2次分けつが始まり、商品性が低下するので、収穫が遅れないようにする。